

Title	高齢者の希望とその関連要因に関する研究
Author(s)	大橋, 明
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43316
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	大橋明
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第 16710 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科行動学専攻
学位論文名	高齢者の希望とその関連要因に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 柏木 哲夫 (副査) 教授 中島 義明 教授 恒藤 暁

論文内容の要旨

本研究は、高齢者の「希望」という心的様相とその関連要因について検討するために行われた。

所謂希望とは、ギリシア神話にも話題のひとつとして示され、人間の心的様相を示す根本的な概念である。しかしながら、その心理学的研究はまだ緒についたばかりと言える。なぜなら、希望とは曖昧かつ漠然とした概念だからである。心理学が科学として認識されるようになった現在において、いかに共通理解の概念として希望を定義するかという点で非常に困難を極めるものであることが指摘されている。実際に、過去の研究において希望は多種多様な操作的定義が採用されてきた。

本研究では、希望の概念を考察し、希望に関する従来の研究を吟味した上で、北村晴朗(1983)に従い、希望を「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調を帯びた感情。特定の目的の実現や、特定の目標への到達を目指すものではないが、人生の特定されない価値や意義が実現される視界または境界としての未来が信頼できるという明るい感情」と定義して実証的研究を行った。

第3章では、まず希望をもたらす事象と希望を減弱させる事象について、自由記述法を通して検討した。その結果、ポジティブな日常生活の出来事が希望をもたらし、悪いライフイベントやネガティブな日常生活の出来事が希望を減弱させることが示された。本研究の希望とは「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調を帯びた感情」と定義しており、未来への明るい感情のみならず、この感覚に伴う快調な感情をも含むものである。そこで、希望を感じたり希望が減弱する時にどのような感覚を抱いたかについて、事象の記述と同時に自由記述法を通して検討した。その結果、希望をもたらす事象と共に、未来に対する明るい感覚、現在に対するポジティブな感覚、あるいは過去の振り返りを通して得られた快の感覚を示す『実存性・時間の快調な感覚』、積極性や向上心が生じたという『前向きな構え』、そして他者や超越者・自然とつながっているという感覚や自分の過去・現在・未来が統合しているという感覚である『自他の一帯感』が生じていることが認められた。一方、希望を減弱させる事象には、未来や現在に対するネガティブな感覚や、過去を意味のなかったものとして否定的に捉えるという『実存性・時間の不快な感覚』、無力感に陥ったり死にたいという感覚を示す『前向きな構えの停滞』、そして他者や超越者・自然とのつながりが無いという感覚や自分の過去・現在・未来が統合できていないという『自他の乖離』が随伴することが確認された。このように、希望とは、未来の明るい感情であるが、『前向きな構え』『自他の一帯感』が伴うことが認められた。

この第3章の知見をもとに、第4章では希望を測定するための尺度を作成した。希望尺度については様々な研究者

によって幾つか公表されているが、Herth, K. (1991) による Herth Hope Scale の下位尺度 (『実存性と見通し』『前向きな構えと期待』『自他の一帯感』の各因子) が、第3章の結果と合致したため、原著者の許可を得た上で、Herth Hope Scale を日本語に翻訳した Herth Hope Scale 日本語版を作成し、その信頼性・妥当性を検討した。その結果、内的一貫性、再テスト安定性、基準関連妥当性および構成概念妥当性が認められた。このことから、希望を研究する上で Herth Hope Scale 日本語版は信頼性・妥当性を保持した有効な尺度であることが示された。

そこで第5章では、第3章の知見から、ライフイベントや日常生活の瑣末な出来事が希望に影響を及ぼすか、第4章で吟味された Herth Hope Scale 日本語版を用いて検討した。まず、ライフイベントの希望に対する効果であるが、「孫の誕生」は希望の一側面である『前向きな構えと期待』を低め、「引退」は『自他の一帯感』を低めることが示された。また、「ひ孫の誕生」は希望を高める傾向にあることが示された。しかし、その他のライフイベントは、その体験の有無によって希望に差異は認められなかった。またライフイベントの評価も希望とは関連がみられなかった。一方、日常生活の出来事については、ポジティブな日常生活の出来事とネガティブな日常生活の出来事の体験頻度による組み合わせの効果をみるため、クラスター分析を行い検討した結果、ポジティブな日常生活の出来事を多く体験する対象者は希望が高かった。ネガティブな日常生活の出来事を体験する高齢者は希望が低く、どちらの出来事も体験が少ないとした高齢者も希望が低かった。このような日常生活の出来事の体験が希望の時間的な変化に与える影響を検討するため、縦断的な見地から検討したところ、ポジティブな出来事を多く体験した高齢者は以前よりも希望が高くなっており、ネガティブな出来事を多く体験した高齢者は『前向きな構えと期待』が低下していることが認められた。出来事の体験が少ない高齢者は、未来の明るさを示す『実存性と見通し』が高くなる傾向がみられた。このように、日常生活の出来事の体験によって希望が変化することが示された。

しかし、日常生活の出来事が希望の時間的な変化に及ぼす効果は限られており、ポジティブな出来事を多く体験した高齢者は他の群と比して初回調査から希望が高いなど、もともと保持している希望に差があったことが認められた。従って、高齢者がどのような物事の捉え方をしているかによっても希望は異なることが推測された。

このことを踏まえ、第6章では、高齢者の「考え方」に目を向け、日常生活の出来事に対する帰属や、家族からのサポート感、死後の生活の存在への信念および体調など背景の認知が希望にどのように影響しているかを検討した。その結果、家族からのサポート感、体調度、活動度、性別、年齢、死後の世界の存在への信念およびポジティブな出来事に対する全般的帰属が希望に影響をもたらしていた。しかし、ポジティブな出来事に対する全般的帰属は、家族からのサポート感や死後の生活の存在への信念をはじめ、体調度、活動度、家計生計の満足度、信仰度、年齢や性別の影響を受けてはいなかった。家族からのサポートがあると感じていること、自分の体調がよいと捉えていることなどが希望を高めるため、サポートがない場合やケガ・病気などで自分の体調や活動が低下している場合は希望が低くなる。ところが、それでもポジティブな日常生活の出来事を体験した時に、その原因が生活全般にも広がっていくという考え方ができれば希望が高まることが示された。

そして第7章では、高齢者の人生の語りを通して、希望と過去の振り返り・現在の状況との関連性を検討した。また、事例を通してその特徴を捉えることを目的とした。この第7章では、「未来の明るさ」に関する語りを軸にし、未来が「明るい」「明るくなってほしい」「わからない」「暗い」とした4群に分類したところ、希望の側面である『前向きな構え』や『自他の一帯感』は、未来を明るいとする対象者では安定して保持されており、未来について「わからない」「暗い」とする対象者は、『前向きな構え』や『自他の一帯感』が不安定あるいは認められなかった。また、希望が高い対象者ほど、現在や過去の問題について葛藤が少なく、未解決の葛藤があっても、それを再評価しようとしていた。語りの中で笑いもあり、家族や友人と話を分かち合うことも認められた。一方、未来を「わからない」「暗い」とした希望が低い対象者は、現在に対する不満や過去の未解決の葛藤を抱えており、自分の人生を再吟味しようとする姿はみられなかった。また、自分の人生について他者と分かち合うことも少ないことが報告された。しかし、事例研究を通して、希望が低い対象者でも、趣味や他者とのつながりを示す語りが垣間見え、微かな希望を抱えていることが認められた。これらのことから、高齢者の希望は、未来への明るい感情に、積極的な感覚や他者とのつながりの感覚が相伴って変容することが認められ、現在や過去の評価と深く関連していることが示されたが、希望は誰もが持ち得る感情であることが指摘された。

以上の研究を通して、①希望とは、未来が明るいという感情であり、そこには積極性や他者とのつながりの感覚が

伴うこと、②高齢者の希望は、日常生活の出来事の体験によって左右されること、③高齢者の希望は、家族からのサポートの捉え方、体調などによっても左右されるが、たとえ悪い状態でもポジティブな日常生活の出来事に対する全般的な帰属を行うことで希望が高まること、④高齢者の希望は、過去の意味づけとも関係すること、⑤希望の低い高齢者でも、微かな希望を保持していることが明らかとなった。

最後に、第8章では、本研究で行われた調査の結果に基づき、高齢者、高齢者の家族、これから高齢者となるであろう人々、そして高齢者に接する可能性のある専門家に向けての提言を行った。

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまでほとんど研究されてこなかった希望という概念に焦点を当て、高齢者を対象に研究を行ったものである。希望とは特定の目標を目指すものではなく、未来が明るいという感情に積極的な感覚や自他の一帯感が伴うものであることを示し、希望の様相を明らかにしている。このような希望について、高齢者の普段の生活に視点を置いて調査と分析を行っており、日々体験される出来事、家族関係や体調などによっても希望が左右されることを実証的に論述した。高齢者は家族との関係や健康を損ないやすく、希望が弱まりやすい。それでも日々体験される出来事をどのように捉えるかで希望が高まることを示した。

また、単に質問紙によって希望を検討しただけではなく、面接法を用いて51名の高齢者の語りに耳を傾けてもいる。そして、希望が健康な人のみならず、様々な葛藤や悩みに苦しんでいる人にも存在することを示した。希望という抽象的概念を実証的に研究する困難さが存在する中で、質問紙による分析と面接による分析を統合して、深い洞察を得ている。

以上の研究成果より、本論文は博士（人間科学）の学位に充分値すると判定された。